

なりとも、二十四時間假死の状態を續けぬと限らない、といふ事を想像し得る。英吉利の或る貴族の夫人は、死後目が醒める爲めの用意に、棺柩から自宅へ電話の設備をして置いた相だ。其電話機のある室には、晝夜當番の者が詰め切りで警戒して居たといふ話だ。其結果はどうなつたか知らぬが死後を氣遣ふ點に同感が出る。火葬場杯で屍の方が熱くなつて、氣が付いて見たら自分は、死んで居たに至つては正に悲慘の極である。

冤罪にして死刑に處せらるゝ人、意識あつて之を周圍の人に訴ふる事の出来ぬ疾患者——例へば腦溢血に罹つた者が言語を發する能はず、文字を書する能はず、手眞似をする能はず、而して意識の明瞭なる場合

の如き——と並べて見て、埋葬後蘇生して悶え死に絶息する者有りとせば、是等は、人生の三大悲慘事とも數へられやう。

小生は、最近六年間に骨肉六人の死に會した。其の第一は二十五歳の妻の死であつた。其の第二は當歳の幼兒の死であつた。其の第三は父の死であつた。其の第四は長兄の次男十八歳の死であつた。其の第五は母の死であつた。其の第六は季兄の長男二十歳の死であつた。父は八十二歳母は七十一歳、共に先づ天壽を全うし得たものと云へるが、他は悉く然らずで、曾てそれ迄は、自己の親族から死人を出した記憶がないばかりでなく、友人の死にさへ立ち合ふ機會のなかつた小生は、近年殊に死に對する概念の鮮明なるを覺える。

妻の死は轉地先きであり、幼兒の死は田舎の預け先であり、二甥の死は家が離れて居るのと突發的なるのとであり、父は小生の宅ではあるが、枯木の如く逝つたのとで皆其最後に間に合はなかつた。單り母だけは、臥床年餘、其間看護に衣帯を解かざる妹と共に、小生及び小生の長男は、極めて安靜裡の瞑目に侍座して、其の最後を見送る事が出来た。友人の篤學なる醫者にも話した事であるが、天壽を全うして死に行く際は、どうしても俗説に云ふ潮の干る時に一致する様である。母の死は正に左様であつた。最後の呼吸は、午前三時の淺草金龍山の鐘の鳴る時であつた。而して最後の脉搏の絶えたのは、その二十分後であつて、其日の干潮時は丁度三時十九分である。

曾て小生は、或る人事々業に従事して居た當時、自己の片腕と頼むに足る五十余歳の一部下があつた。平素酒を嗜む事飯より甚だしく、彼の同僚も頻りに心配するので仕事の一句切り付いた時、一週間の休暇を與へて、節酒すべき事を彼に言明した。其三日目に彼は、突如腦溢血で死亡した。死亡の刹那に彼の亡靈を見た經驗をした。白々と明け離れんとする夏の朝、電燈の笠と紐と及び卓上の置電燈を輪廓として、模範たる白い煙の様な裡に、彼が正座して枕邊にあるを見て、小生は愕然として驚いた。同時に直覺的に彼の死を想つたが、正に之は、彼の最後の刹那の時刻に、吻合する事が後から證明された。科學の説明如何に關せず、世に不可思議の靈感あるを信ぜざる

を得ない。

曾て乃木大將が、旅順の包圍軍中一令息の戦死後、残る令息戦死の利那、其亡靈に接した由を、志賀重昂先生の直話で小生は詳知した。又同將軍には、北越方面演習の途次、旅館の亡主婦の幽霊を見た経験があつたと聞く。それは着物容貌其他から、其主婦に違ひない事が其の家人の説明で判然したのだが、科學者は之を、亭主が其亡き妻を偲ひ、兒供が其亡き母を偲ひ、奴婢等

犠 牲 誌

朝日某が、天下の富豪を弑殺した其の當夜、狹斜の巷は、頓に殷盛を極めた相だ。

も等しく其の亡き主婦を思ひ出し、居合はした家人悉くが、故人を想起した瞬間、それが深夜人靜かな時、至純神の如き乃木大將の様な外來者が其の家に在る時は、倏忽として亡靈即ち感應が、其外來人に致さるゝものだと説明する。科學者の説明は怎うでも小生は、人間出生の芽出たきと共に、死亡の神聖なる事及び亡靈の存在する事も、之を信ずるのである。

そして本所、深川の天地は、景氣よく酒が賣れた相だ。殺した者も殺された者も、變

な方面にまで犠牲を拂つた事である。

曾て憲政會の頭目に、多大の好意を寄せ居た神戸の何とやら云ふ成金が、どうした経緯からか、珍品數個の贈與を發表して世間を騒がした。曾て國民黨に籍を置いた前代議士の某は、脱黨して後、以前親分として載いた黨の内幕を素ッ破抜いたばかりでなく、現に天下の法廷に醜狀を曝らして居る。癢に觸る事が在つたら、其の以後に於て好意を寄せなければ、开れで事は濟み不平が在つたなら、脱黨した开れだけで事はアツサリして居る。夫れを何ぞや、四十女の不貞腐れ然と、ヒステリー根性を飽く迄發揮して、暗闇の耻を洒ア〜と毒づけるは、其の邪智佞辯、其の陰險陋劣、开座奴等の面上に唾するも、以て憐らぬ心地が

する。遺に此間に處して、兩頭目の面目が現れた。剛堂が何やら辯解して耻の上塗りしたのに反し、木堂は全く默殺して居る。兎に角、其の珍品に因つて憲政會の拂つた損害、其の子分を持つた國民黨の不名譽、いやはや多大な犠牲と謂ひ得る。交り絶つて後、惡聲を放たざる底の人物は、現代に於て果して無いのであらうか。

小生の長兄は、年齢三十にして時の縣令の態憑に基き、其縣下唯一の金融機關として一銀行を作り、常務取締役を勤めて居た資本金は壹百萬圓に過ぎなかつたが、三十年前の壹百萬圓は、現今の同じ數字よりは貨幣價値の存するのであつた。此男、無事に此の仕事に成功して居たならば、今頃は多少實業界に驥足をのばし得たでもあつた

らうに、其同僚及部下の爲めに、天性の好人物に乗せられて失敗した。美事他人の借金を背負ひ込んで蹉跌した。小生の兄弟は元來相當鼻ツぱりの強い癖に、皆お人好しであつて、可なり注意深くしながら、日常卓を並べて仕事して居る人にさへ、時に致さるゝ事があるとせば、情々自分の愚を省みずには居られまい。

然し他人の犠牲と成る者は、その相手方よりは、先づ正實な資質あるものとして諦めねばならぬ。なほ他の方面から觀ても、此の米の高い世の中に、自ら進んで甘んじて、赤の他人の犠牲になり得る人があつたなら、餘ッほどの偉人に非ずんば、愚人でなければならぬ。

過去を顧みて小生は、可成り骨肉の爲め

に犠牲を拂つた様な氣もする。けれども其の間一點の利己概念が、果して無つたかを考へるとき、必ずしも保證が出来ない。先づ小生は、高等小學二年を終ると直ぐに、中學の試験を受けて入學した。其の當時の實際が、規則上は高等小學二年から入學し得らるゝ筈でも、概ね四年の課程を卒り、尙其上に氣の長い連中は、補修科一二年までもやつて、それから中學に這入る者さへあつた。尤も开慶連中の方が今日成功の域に居るらしいが、兎も角小生は親仁の年齢を考へて、無事に最高學府を終るには、七十歳以上に成るに願ひ、急がずんばある可らずと、大急ぎで中學に飛び込んだ。然し自身の希望は、一日も早く中學の徽章ある帽子を被りたいと云ふ生意氣な野心が、手

傳つた事も否めない。

中學を卒つて早稻田大學を選んだのも、老親に早く安心させたいと謂ふのが、當面の申狀であつて、兄貴共からは高等學校より帝大に這入る様に、極力勧められたが、偶々家運の傾いた當時で、いつ學資が足らなくなるかも知れないといふ口實の下に、敢て私立の早稻田に入學した。實は、當時高等學校の試験が莫迦に六ヶしくて、幾度落第したなら入學し得るか、マルで見當がつかない。入學試験に三回落第して、發狂した友達もあつた位で、其の點は、無試験入學の早稻田を選んで、悠々難を捨て、易に赴いた事も否めない。

早稻田を卒業して、支那方面に野心勃々たるものあつたに拘らず、保證人のS博士

の肝入りで、學校から推薦されて、N生命保險會社に月給十八圓で採用されたのは、卒業試験に合格し得た事の解つた翌日、卒業式の十日前であつた。滿州邊で馬賊の群に投じて、今頃軍曹位には成れたでもあらうに、世智辛い東京で、混雜する電車に人の足を踏んで怒鳴りつけられるよりは、餘程のんびりと呑氣な生活が出来たらうが開れも、親に安月給でもいゝから、兎に角早く扶持に有りつくのを見せたい心願さを殊勝に裝ふ一面には、矢ッ張り海外に危険を冒すよりは、内地で米屋の拂ひが滞つても、命に別狀なきを期する臆病だつた事も否めない。

N社にあつて一二年、二十六歳にして小生は女房を貰つた。自分一人の口を糊する

資格もないのに生意氣な譯ではあるが、實は名古屋支店に赴くに當り、名古屋と新潟は青年の危険地である。須らく女難除けの守本尊なかる可らず、而して老親に早く安心させねばならぬ、といふのが、表面の理由であるが、唯、他の人が持つなる女房と謂ふ者を、自分も貰つて見たいといふ好奇心の、満足だつた事も否めない。

N社にある六年、飛び出して一二の保險會社を渡り歩いた。而して早く相當の地位を得て、例の親達を安心させたいと腕くのであるが、實は内々其等の會社に於ては、小生の我儘にして生意氣で、腰餘りに低からずして頭の徒に高きため、自ら勤め悪く成つたのも事實であつた。

そんな事を續々書き立て、居たら逆も際

限は無いが、要するに其後、兄貴の借金を背負つて之が整理に没頭したことも、實を謂へば其の當時伊藤痴遊君の拵へた興信所を、只で貰て見たものゝ、格別大した仕事の無い氣紛れの手に染めたに過ぎなかつた郷里の没落前後に薄倖なる兩親と妹とを引き取つて、敢て扶養の義務なき末弟の小生が、貧乏世帯に寄食させたのも歸する所は女房に死に別れて子供二人を残された爲め小生の便利上から割り出した筆法だと評されても、一應は辯解の辭を出さない積りである。

母親の臥床年餘、必らず一週一遍之を抱いて入浴せしめ、乳母車に乗せて墨堤を押し廻した事杯も、近隣の人達は、小生を以て一廉の孝行者と云ひ囃したが、實以て左

様な次第でなく、貧乏者の小生には、看護

婦を一年餘も雇ひ切りにして置く餘裕なく下女拂底の時代とて他人の力を借りる由もなく、止むを得ず妹と共に、小生自身が發動したに過ぎない。唯、母の病み呆けたる口から浴後の氣持宜さ相な感謝の言葉と、運動後の元氣の出たらしい感謝の言葉を、此上もない楽しみとして、期待して居たに過ぎなかつた。

以上の事實は、決して自己の自慢話を、文を舞はして廣告するのでは更でない。寧ろ小生の先輩知友にして、今に小生を買被つて居る向があるならば、之によつて小生の如何に詰らぬ人間なるかを、改めて御詳

知を願つて置きたいのである。

單に自身の經驗から、开れも眞劍なるべき骨内に對する經驗から割り出して見た小生の結論は、世に犠牲的精神に富む人物杯と吹聴さるゝのは、甚だ失禮なる申狀ながら、却て面妖な人物が多いのだといふ事になる。日露戰爭頃、浮田博士が日本軍人の強きは、義務觀念よりも名譽觀念に強きが故なりと論じて、一世の論議を沸騰せしめた事があつた。眞個に犠牲的觀念のみによつて凝り固まつて、些の私心なき偉い人があるならば、是非一遍お目にかゝつて見たいと念じて居る。

女 難 観

三二

トルストイの「我が懺悔」に斯ういふ断が書かれて居る。昔、或る廣原旅行者が恐ろしい野獸に襲はれて、水の涸れた井戸の中へ逃げ込んだ。所が更に怖る可きは、その井戸の底に一匹の大蛇が潜んで居て、其の男の姿を見るや、巨口を開いて咬みつき一呑みにせんすばかりの勢で身構へて居たのである。此の不幸な旅人は、野獸の怖ろしさに外には出られず、と謂つて大蛇の怖ろしさはそれ以上で、逆も落つて内にも居堪らない。辛くも其の井戸の罅隙に生へた野草に掛つて、生きた空もく打慄へて居たが、其の間に腕が段々疲れて来る。愈々

其の腕の疲れに堪へ切れない時が来たならそれこそ彼の死の時が来るのだ。然るにまだ問題は、それだけに止らない。更に更に怖る可き事は、いつの間にもやら何處ともなく現れた白鼠と黒鼠の二匹が、彼の一時の安を偷める蔓を噛り初めるではないか。腕の痺れを氣にしなから、上の野獸と下の毒蛇とを見較べて居たとき、怖ろしや突如此の鼠を發見した時、その驚きはどんなであつたらう。死の手の避け難きを全く觀念しながらも、不圖自分の傍を見ると、野草の葉陰に、數滴の蜜が宿つて居るのを發見し無意識に其の男は、舌を出してそれを舐め

た。といふ事である。

その断は之で御仕舞で、其の旅人が鼠のために頼みの蔓を断ち切れ、毒蛇の餌食と成つたか、進んで井戸から飛び出して猛獸と健闘し、之を打仆して首尾よく其の災難を脱し得られたか。將た又、無意識に舐めた蜜が毒汁であつたために、大蛇に呑まれ去らるる前、猛獸に喰はるゝ前に、其の舌端から恐る可き毒素を吸収して、遂に死亡し去つたか。若しくは其の舐めた蜜が莫迦々々しい不思議な仙薬であつて、風前の燈火にも等しい命が助かり得たのみならず奇體の大蛇と怖る可き猛獸とを生擒りにして、其の國の王様の褒賞する所と成り、遂に王様の姫君に惓望されて、其のお婿さんに成つたといふお伽話式の、芽出たき堯が

附くのか、或は生擒にした毒蛇と猛獸とを淺草邊りの見世物に持ち來つて、新聞なんぞの大評判と成り、却つて之がため大金持ちに成つて、遂に昔、己が命を覗つた猛獸毒蛇の恩に感じて大々的感謝祭をやつたといふ現代式の、成金振を發揮するに至るのか、其の結果は一向に不明である。

が小生も五年前、家郷の没落前後、浪人生活の眞ツ最中、不遇の老親骨肉を擁して途方に暮れた折から、惡龍に等しき災厄、猛獸に等しき禍難に出會した逆境裡の宙アラリンに於て、毒蜜を舐めたと同じき目に遭つた經驗がある。従て此の比喩談に對して、極めて意味深く當年を顧みて、泪ぐましく感じないでは居られない。

其の經驗とは女難である。

よく市中の四辻で、易者が、「貴公は女難の相が在るから、氣を附けられエ」杯とやつて居るのを聞く事であるが、男に女難ある以上、女にも亦男難のあるべき理屈で、男に騙され裸にされたとか、一生を棒に振つたとかいふ女が、隨所に在るにも拘らず曾て男難と云ふ言葉を聞いた事無き以上、男の女から受くる災難は、女の男から受くる災難よりも、遙かに高價に値ひするものに違ひない。だから開れだけ、女難は怖いものに相違ない、と云ふ事を情々小生は感悟した程に、ヒドイ體驗をしたのである。

元來小生は、容貌に於て風采に於て、言語に於て態度に於て、而して主義主張に於て、決して女から持て囃さるる素質を有せ

ざるを、固く自覺してゐる者である。然るに何の滑稽事ぞ、此の無骨なブツキラ棒な頑固な蠻的な、女に嫌はれよばとて、好かれ相もない小生の特徴に、ゾツコン惚れ込んだ相手が有つたのである。そして小生は初めて料らずも、今迄問題にした事も無かつた女に關する徹底的の智識を授けられた同時に世に怖る可き女難の災厄あるを、易者の言の萬更嘘ばかりでない事に、感心した次第である。

その相手の女性といふは、年齢及素性等も確實でないが、唯、其の當時一待合の女將で在つた事、其の女將が當時亭主の無かつた事、而して兎も角、女一通り以上の學藝と儀禮に通じて居た事だけは事實である。そも如何なる高貴の家庭に因縁在るか、又

いかなる事情の下に待合職業を初めたかは一切不明で、女の口ばかりを信する譯に行かない。然しその告白に偽りなくんば、正に數寄を辿つた運命は、蓋し一篇の小説であらう。其の頃興信事業を營んで居た小生は、敢て之を調査して見やうとも考へず、解る時には解るだらうと放つて措いたが、兎に角珍らしき謎の女であつた。

据え膳喰はぬは、男の耻といふ不届千萬な謬あるを引例して、部下の一人が面白半分小生を嗤しかけ、彼女の戀慕の情を満たしてやる事は、男一匹の意氣地でもあり、又慈善の一端なりと迄力説したものである。左らぬだに内外の冗紛事に、荒み切つたる頭腦は、いかにも道理あり相な理窟迄を考へ出して其の女と關係したのであつた

正に關係したのであつた。

然るに年齢に於て境遇に於て將た思想に於て、同様を許されざる幾多の障礙は、小生退かんとすれば彼女縋りつき、小生逃けんとすれば其の女纏れつく、可惜他に費して相當値ある幾多の考量を、此の問題によつて煩はさるゝに至る。是れ正に女難でなければならぬ。

其の間女の、代理者と名乗る手合に辯護士三名、新聞記者五名、女看護婦會長及骨董商人などの外、千三ツ屋、雜誌業者まで入り代り立ち代り來るに折衝すること前後數十回、何等要領を得ない其の連中は、悉く小生の眞情に同情して引き下るばかりで埒もなく時日は経過したのである。或は元K市圖書館長たるY氏、HG通信社長M氏

B 生命保険K氏及N信託會社の顧問辯護士
U氏等をも煩はしたのは、小生今に恐縮す
る外はない。而かも其の前後、本人が自宅
に暴れ込んで来た事二回、勤め先きの會社
に嘔鳴り込んで来た事一回、重役宛親展書
小生宛脅迫狀連日といふに對抗して惡戦し
た。イヤハヤ誠に以て災難でなければなら
ない。

偉大なる時運の経過は、三四年振りで事
件は解決し、幸にして小生は、出刃庖丁の
錆にもならず、新聞の三面記事の材料にも
ならず済んだは済んだが、いやどうも當
年を顧りみて、如何に非道い苦悶をした事
かと、自分ながら呆れる。

我朝の歴史を詮索して、色許男神シコノノカミの女難
神話の上古や、奈良平安の時代やは、暫く

詩的情話として措くとするも、源平時代に
佐藤忠信が、浮氣な女に關係して、其の女
が媚を他に代へたため、二十八歳を最後と
して、凄壯の死を遂げた女難武人の代表者
なるを最ッ先きに、色々の時代に色々の女
難の犠牲者が澤山にある。

鎌倉時代に於ては、源頼朝といふ男が、
生きては政子といふ女の嫉妬に苦しめられ
死しては同じ政女のため、自己の子孫と自
己の事業とを棒に振つて、僅に三代數十年
ならずして、天下一統の功績が、北條の手
に歸し終つたのは其の一例である。

南北朝から桃山時代に於ては、應仁の亂
を初めとし、閨門から起つた争鬪が尠くな
い。殊に豊臣秀吉といふ人物に至つては、
最も有名なる好色家だけに、草履取りから

天下取りまでに出世したと同様、仲々女難
史上特筆大書に値する偉人である。また新
田義貞が、勾當の内侍に打ち込んで其の愛
に溺れ、足利尊氏追討の機を逸して、建武
中興の業を根底から崩し去つたのが、日本
一女難の隊長たる如きも其の一例である。

近く徳川時代に於ては、將軍家大奥の亂
脈や大名の御家騒動の原因が、悉く皆、其
の端を女に發せざるはない。名俳優生島新
五郎兄弟が、兄は奥女中の繪島の姪奔度な
きたため、弟は尾州家の天龍院の好色類なき
ため、共に累されて流罪に處せられ、投獄
せられ、何れも間もなく病氣又は發狂して
此の世を去つた如きは、又其の甚だしい一
例である。

社會組織の全然變化したる明治時代に於

ては、事餘りに新らし過ぎるが、生存競争
の激甚を加ふると共に、自己の貞操を金に
代へて、活路を發見せんとする女性の横行
が、正に慥に男子に向つて、往時よりも危
險のプロバビリチーの、甚だしく激増せる
は、争ふ可からざる事實である。

畢竟、色々な男が様々な女難に出遭つた
事は、敢て歴史上、特殊の書物を繕く迄も
ない。いかにも表面偉ら相に構えて居る先
輩連中でも、此の點には、幾分の苦心を拂
つた筈である。主家の姫君に惚れられて、
自分の立場を考慮した結果、之を刎ねつけ
たため、姫君の怒りに觸れて、遂に其れが
ため悲惨の最期を遂げた杯といふ、前途有
望な青年の一代史程でなくとも、相當の情
話がなければならぬ。

避けんとして避け難きは、風潮の女難である。自ら進んで女難に出會し、寧ろ艶福を贏ち得ん杯といふ特殊の勇氣ある御仁が

あるならば、一夕共に大に痛飲して、小生の體得した女難除けの秘訣を御傳授申したい。

下 獄 記

「某年某月某日、われ獄に投ぜらる」と謂ふと、如何にも大袈裟で、一廉の愛國の志士が囹圄の辱に遭つた様に聞えるが、事件は开座大したもので無く、當年貧弱なる一私設興信所長たりし小生が、簿ボンヤリした部下の一人に、脅喝罪の嫌疑を受けて引つ張られた者が有り、當面の責任者たる關係上、其情を知悉して不正金を收受したんだらうといふ、思ひがけない飛ッちりを喰

らひ込み、十日ばかり未決監房に放り込まれたに過ぎない。而かもそれが、大枚五十圓のカネの問題に過ぎないとあつては、豈夫れ、笑はしやがるの甚だしいものではないか。

此頃は、頻りに偉らい人や偉ら相な人が刑事事件に連座して收監され、又は收監され相だ杯といふ新聞記事を散見し、或は何々某といふ學者達が所謂筆禍を買つて、監

獄に送られた杯といふ珍事を聞睹するに比すると、小生當時の僅かに十日許りの未決監房生活などは、實以て詰らぬ材料の骨頂ではあるが、然し自己に取つては、其前後程目まぐるしき境遇にあり、思ひ出多き時は無かつたのである。

曾て小生は、何か國事犯位のもので、或る短い期間を、世と全く相去つた獄中の生活を送りて見たなら、どんなに心身の修養に資する事があるだらう、此世に於て此世からの地獄の光景を自ら體驗するのは、いかに趣味深い事であらうと、途方もない好奇的想像を逞しくした時があつた。が家郷没落の整理の眞つ最中、家兄の名譽恢復努力の多事るとき、内に年老むたる兩親と幼少なる兒女とを擁し、外に娼集せる冗事と

債鬼との對抗に、日も尙足らざる繁忙裡に於て、突如監獄に放り込まれるとは、神の惡戯の非道過ぎたものであつたが、寧ろその瞬時吻つと一呼吸ついた形でもあつた。内外攻め寄せた禍難に、身も心もへト／＼に成つた折柄、規則正しく衛生の設備整ひ俗世間と全く隔離して外憂を杜絶し、それで宿錢要らずの場所に身を措く事は、却て此上もない安靜を與へられ、頓ては發狂するか自殺せねばならぬ環境と、掛け離れた當時十日間の獄中生活は、其等一切の苦難から一時を免れしめ、將來の緊張發奮の度を更に大ならしめた程、有難く感じたのである。

一體日本の監獄設備は、ベルギー、オランダの模範監獄に次で、世界有数の完全な

ものだといふ講釋を、岡田博士から教へられた事もあつたが、イヤ然し實際に於ては蓋、想ひ央ばに過ぐるものがある。

警視廳の護送自動車に乗せられて、何處に連れて行かれるかも知らずに居た小生が突如東京監獄の赤煉瓦の内に放り込まれると直ちに、駈け寄つて來た一人の官吏が、「どうしてアナタは、這麼所へ來たのか」と親切相に訊ねて呉れた。何が何だか解らないが、巡查などと云ふ手合の、雲介連にも劣つた下品な者である事の、感想を途切れ／＼に述べると、いかにも氣の毒相に慰めて呉れ乍ら、カードの記入杯まで其人がして呉れた。特に小生のために獨房を用意して、翌朝早く見舞つて前夜熟睡し得られた歎、と心配して尋ねて呉れた。此人は

後日聞いて見ると、京都の帝大を前年卒つた法學士で、特に監獄學に興味を持つたI看守長であつた相だ。

時が時、場合が場合、事件が事件だから餘り當時の記憶は明かでない。兎に角、監獄吏が一般囚人を見るの苛酷なる殆んど言語に絶するは、正に特記に値するものがある。幸か不幸か小生は、前記の様に思はぬ看守長から思ひも寄らぬ同情を受けて、甚だしい侮辱を受けずに一貫したが、髻面の大の男が、聲を放つて慟哭する凄慘な光景を目撃した事の、一再に止まらざるに徴しても、全般が察し得られやう。尤監獄側から云はせると、一度監獄の門を潜れば、未決監から無罪として釋放さるゝは、其統計上百分の一あるかないかで、保釋若しくは

責付で出監し得る者も亦、百分の五乃至十に過ぎないのである。従て監獄に來る者は其中八九分迄罪人なので、未決囚人と雖裁判の判決以前、既に大部分罪人である。といふ結論を以て律するのは、止むを得ないぢやないかと謂ふ。

何にしる、地獄の赤鬼青鬼に比すべき看守獄卒と雖、是れ人である以上、多少の人情はある筈、之に關しての珍談は、小生が收監された翌日、俳句の書物を差入れて呉れた篤志家があつて、其頃駄句を捻つた當時なので、ヒマに任せて俳句三昧に耽つて居ると、いつの間にかやら小生を呼ぶに「先生」といふ敬語を以てし、獨房日永の徒然を職務の餘暇、小生を慰めに來る看守の二三が出来た事である。开れは其連中、時々

公務の合間に運座を開いて、俳句を練りつつある相で、同人十二三ある由、其内の熱心家が菓鴨とやら小菅とやらの監獄に轉動しない以前は、四五十名の俳句同人が在つたと謂ふ。あの赤堀の地獄裡に於て、舊式にしる月並にしる、十七文字に閑日月を樂しむ人ありとは、何と床しい極ではあるまいか。

人情味といへば、囚人同士の間情は格別な様で、僅かの經驗に過ぎない小生の見聞からするも、一寸電車内足を踏んで、怒鳴り合ふ様なものでないらしい。警視廳に留置された一夜、小生と同室の六七人中、昔で云へば牢名主といふ格の若い男は、之も新入りの小生を呼ぶに「先生」を以てし、小生のために布圍を敷いて呉れた。此男は拘

摸の常習犯で、警視廳監房の常得意であつた。モ一つ、區裁判所に引き出された當日雨に濡れた小生の羽織を後方から、誰とも知らず拭いて呉れる者がある——區裁判所が巴町に在つた當時で、公判廷に瀆所から往復する途中雨に濡れたのである——顧みると一個の美少年で、小生の動作を頻りに氣遣つて居るのであつた。此少年は、自轉車二百輛を盗んだ搦つ拂ひの親分であつた。

小生は、常に泥棒や強盗に近付きがないから、平素开塵連中は、定めし赤面の熊坂長範的の怪異な弾猛者とはかり思つて居たが、這度美少年が泥棒と云ふものであり、喧嘩を吹つかければ、逃げ出し相な瘦せた男が、強盗犯人杯と知つた時は、實に意外

の感に打たれざるを得ない。而して監獄に來る者は、大抵自己の境遇なり慾望なり、又は誘惑なりに打ち克ち能はざる人の宜い氣の弱い、畢竟弱力意志者が多いのであつた。一面から謂へば、寧ろ同情に値する精神的若くは、生理的疾患者の存する事をも感じた。

要之、小生が未決にしろ十日にしろ、監獄に放り込まれたのは事實で、それは丁度警視廳に於て、惡徳新聞記者退治、不徳興信所員征伐を斷行した當時であつて、問題の其部下が、某大商店の番頭の家庭秘事の解決を托され、之が報酬として五十圓の加盟金を貰つたと云ふ單なる事象に過ぎなかつた。然るに脅喝されたと云ふ番頭が、脅喝したと云ふ小生の部下よりも、一枚上の

代物であつたに拘らず、本人が眞信所員なるが故に、裁判官の心證極めて面白からず遂に自由に依らず、證據に依らず、簡單なる認定の下に、法に觸れる事に成つたのは氣の毒な事で、小生としては、其部下を救はんとするれば己れ自らの身が危く、自身を守れば部下を死地に陥るゝ事に成る。誠に閉口した立場であつたのである。而してN檢事は小生の罪を論告して曰く「被告は、一見して洵にシツカリした男である。決して部下の非行を知らぬ筈はない」と、ボンヤリして居るから法を犯すと云ふ話は聞いたが、シツカリして居る爲めに、法律を犯すとは面妖な話で、その部下も亦、謝禮金の意味をボンヤリして居た爲めに、遂に脅喝罪に陥つたとあつては、共に宜い面の皮

の甚だしいものである。

複雑の上にも複雑なる現世に於て、紛雜の上にも紛雜を重ねる活社會に於て、いつ何時災禍に罹らぬも知れぬ。注意して道路を歩いて居ても、無鐵砲なる自動車を打つ突けられる事があらう、安心して電車にのつて居ても、衝突脱線して不意の怪我を被る事があらう。釋迦や孔子や、ソクラテスやキリストやが、或は磔刑に處せられ、毒殺の厄に遭ひ、喪家の犬の様にさ迷ひ、又は樹下石上に艱苦を積む程の決意はなくとも、如何なる突然の出來事かのために、善意的職業上の危禍を買はぬとも限らぬ。而かも其種の災厄は、免れんとして免れ得ざる所に、眞の災厄たる所以があるので、小生の場合の如きも、輕微の事犯に拘らず、

其部下に辯護士一名、小生のためには興信所から一名親族から一名知己から一名、計四名の法學士辯護士が附いたのであるが、之が抑々判官達から臭いと睨ました一因でもあつた。當初警視廳の警部は、小生の無事に同情して、此事件を脱する方途を教へた。然し小生は其謎を解し得なかつた。一面からすれば、何等後ろ暗い點なき自己を顧みて、事件を何の糸瓜とも思はなかつた是等が不測の災禍と成つて、十日間珍らしい地獄に、追ひやられた原因と成つたのである。

日本も段々陪審制度が實現されるだらう

が、そうならば極めて少數判官の認定よりも、諦めよい結果を見る様に成るであらう。先達の新聞に、米國サクラメント市高等法院で、二名の若い而かも頗るの好男子が、價格二千弗の、自動車を盗んだ廉で陪審裁判を受けた。處が六名の婦人陪審官中、五名迄無罪を主張し、遂に無罪説が勝ちを得た。といふ話が出て居る。それ程でなくとも、天秤にかけて有罪か無罪かわからぬ時には、無罪の方に決める位の公平はありたい。一體人間が、人間を裁判する資格はない筈だ。

後 妻 論

畏友K、S兩君の肝入りと、先輩T氏の口添とによつて、舊藤小生は、母無き二兒の爲めに後妻を娶り、六年來荒み果てた家を齊へ、着々不如意の環境を脱せんと腕きつゝある。

八億六千一百万年以來、世に人類と稱する動物が生れ出でて以來、其の形式は違つても、其の手續は異なつても、兎も角、男女が一對と成つて社會生活が營まるゝ以上一夫にしる多夫にしる、一婦にしる多婦にしる、夫婦と云ふ制度が出来して、茲に家族となり、部落となり種族となり、而して一社會一國家を形成するに至つたとすれば

結婚生活杯といふものが、一向に珍らしくもなく、或る一男が一女を娶り、又或る一女が一男の好配を得るは、何等異とする事象でない。従つて其の同棲生活の過程に於て、「合せものは離れもの」と在つて、意見の衝突其の他の原因で、生別する者もあるだらうし、どうせ同じ月日に生れたからとて、一緒に同時に死ねないとすれば、どちらか一方が此の世から影を没するとして、後に残つた方は、死別の悲痛に打たれるは明白で、是れ亦、傳統的に有り觸れた問題である。少しも珍でなく奇でない。と謂つて仕舞へば、まア开慶ものかも知れないが

特定の男女が、直接其の事件に觸れた場合決して香氣に鼻唄歌つて、平然と過し去らるゝ譯のものでなく、相當深刻なる人情味を、嘗めさせらるゝことに違ひない、相互に飽き果てゝ合意の離婚にしても、相別れて多少の感慨はあるに相違ない。彼の良人を五十何人取り代へたと聞く幽蘭女史にした所が、靜夜省みて情々亭主運の拙なかつたを嘆く時もある可く、例へ草履の鼻緒でも、切れて心地の宜いものか否かは、敢て俚語子の言に俟つまでもなからう。殊に飽きも飽かれもせぬ夫婦の間に於て、突如一方が死歿して、加之兒供迄殘されては、當人の身に取つて、正に天下の一大事でないならぬ。

故三宅博士の隨筆中に「社會で知名の士

であつたり、殊に教育者として令名ある人の中にも、夫道ばかりは缺損して居ると見えて、妻を虐待する人は少なくない様である(中略)。今日妻の死は、大部分其の夫が殺したものと云つてよからう。唯夫れが死刑に成らぬのは、法律に適用せらるべき條文のないのと、一々死刑にして居ては、社會が成り立たなくなるのと、判官の目に映する範圍では、殺人の行爲が現れて居ないからであらう。」と論じて、何故斯る奇矯の言をなすかと云ふに、之は幾多知人の偽らざる告白と、先生自身の、將に夫人を失はれんとした時の、感想とに立脚した眞面目な結論である、と説いて居る。

今日之を省みて小生は、亡妻が稀に見る貞淑な婦人であり、而して其の死が精神的

に小生の虐待に因つたものである抔いふ事柄を、茲に詳述する邊はない。要するに問題は後妻難に歸する。

從來吾人の受けた教育は、未だ子を養ふ事を知つて、妻を娶る者にあらず的の筆法で、第一の女房による經驗智識は、頓て第二の女房に活用して、極めて旨く行く可き理屈のものではあらうが、實際は左様でないらしい。後藤新平氏は「妻の教育は、少くとも十年乃至十五年を要する」と話して居る。「同棲十三年」の著者松崎天民子は泌々と、繼母及繼兒論を吐いて、男が第一の妻を失ひ、第二の妻又は第三の妻を迎ふる場合に、其の第二又は第三といふ順位稱を除き去つて、眞個の「妻」を得るは六ヶしくない。然し乍ら兒供の爲めには、第二の母

又は第三の母を迎へて、其の第二又は第三といふ順位稱を、決して除き去る事能はざるは勿論、眞實の生母以外に、「母」はあり得ないといふ意味を説いた。即ち夫婦の結合は、第二でも第三でも自然に行けるが、兒供に對する母の愛なり感情なりは、其の實母實子間にあらざれば、到底虚偽なもので、其の虚偽の情を繼母繼子間に、強ゆ可きでないと言ふのである。

若し夫れ、後藤新平氏の説の通り、新しく女房を教育するに十年乃至十五年を要するとせば、小生は亡妻と同棲する六年、遂に女房教育は全く半途に終り、今茲、復改めて新しき第二の女房に對し、教育の第一年から授けんとするは、想へば前途も遠遠である。然し是れが、浮世の運命づから

れた役目かも知れぬ。

幸にして二兒共に頑健、物心付く前に實母に別れ、當年十歳の一男と九歳の一女とは生れて初めて母の愛に意識して、無邪氣に悦んで暮して居る。第二妻を迎へた當夜小生は妻と兒供とを對座せしめて、「これは貴様達の繼母たるべき婦人である。世間では繼母が繼兒を苛めるのが珍らしくない。貴様達も此の母親に苛められるべき可能性を持つて居るのだ。が然し、自分達を生んで呉れた實母でない婦人から、母の愛を以て取り扱はるゝならば、正に感謝すべきで正に感謝せねばならぬ次第である」と兒等に諭し、妻に向つては「知らぬ女の産んだ二兒の繼母となるも是れ畢竟運命である。繼母となつたからとて、兒供を苛めねばな

らぬといふ規則はない。否、寧ろ美はしい兒供等の發情が、貴様に對する愛育の感謝であるならば、以て銘記すべきである。生みの惱みを味はらざりし二兒から、母に對する敬愛を致さるゝならば、開れて満足すべきであらう。それ以外の事は、自分自身の徳を研いて行く可きだ」といふ意味を、敷衍して申し渡した。飲んだくれの親仁の不遇に六年間荒んだ生活を俱にして來た二兒は、繼母にしる何にしる、母親と名の付く親仁の後妻によつて、不行き届き勝ちの過去から脱して、心から喜悅を抱いて居る。是に於て小生も、漸次荒廢に歸せんとした家庭の和樂を、取り返し得た様な氣持を感じる。

然りと雖も、男子妻を得て満足す可きで

なく、兒供を得て開れを満足す可きでなく別に成すべき別天地がある。「内に溢りに妻子に溺れざる者は、親に事へて必ず孝、外に朋友を欺かざる者は、君に事へて必ず忠」とか、「愛に溺るゝ者は、制を妻子にうけ、

失を患ふる者は、己を富貴に屈す」とかいふ古言は蓋、此の際、小生の現在に對する箴言でなければならぬ。

(完)

墨汁餘滴

歳晩の夜十二時頃、龜澤町で入庫すべき電車に乗つた一醉漢が、何と謂つても降りぬ。時は經つ寒くはある。後から續いた電車が大部重なつた。監督が説明しても、巡查が駆けつけても手のつけ様がない。堪り兼ねた僕は、其車内に飛び込んで「何だつて降りれエんだ、莫迦野郎みんなが迷惑してるのが解られエ歟」と怒鳴りつけて、其儘かまわず入庫し給へと車掌に注意した。醉漢はフロッタ姿の紳士である。僕の怒聲に刺戟された車掌が、其奴を背負つて他の車に移らした。見れば敵者であつた。

僕も其奴も中之郷で降りた。相手は敵者だが用捨はならぬ。譯の解らない野郎を打ちのめすには、人通りの稀に成つた夜中で、誠に都合が宜いとも考へた。

其紳士の曰く、「アナタは先刻いろ／＼私を罵倒したが、何ういふ譯ですか」とある。そこで僕は「まだ貴様文句があるか。开腹服裝をして

居やつて、公徳てエ事を知られエ歟」とやらかす。「私には、アナタの謂ふ事がわからない」「解らなけりや教へてやらア、日本ぢや十二時過ぎを夜中と謂ふんだ。其の夜中を急ぐ乗客達に、迷惑をかけて濟むと思ふか」「フン、アナタは西洋の事を御存知歟何れを吐かすんだ。今、俺は、日本に居て日本を論じてるんだ。莫迦野郎」大分に問題が、方面違ひに走つた。が段々と話が進んで、眞面目に相手の申狀を研究した結果が、彼は不具者である。電車に乗る度に混雑の折は何處も何處も待たされた。又、断られもした。今夜乗る時は、乗換の無い事を確めたに拘らず、入庫の宣告をうけた。於是、降車を拒んだのだ。電氣局の不親切に憤慨したのだ。平素が平素だから、特に酒の力で溜飲を下げ様としたのだとの話。訊いて居る内に、僕は彼の不具者たるに同情し、彼は僕の疝癪持ちを知諒し、握手を交換して、暗い道で分れた。後に考へ合せると、其の男は、御大典親兵式に参列の目的で、上京した在郷軍人の將校らしかつた。

——大正四年——

附 録

愚につく噺

女房哲學

未だ兒を養ふ事を學んで、而して後に妻を娶る者は有らざる也。といふ古語がある歟どう歟は知らぬ。

假りに、教育が進歩して現代の女學生杯の様に、婚嫁前早くも、産兒や育兒の知識を豊富に著へて、其上に性學の實地研究まで、徹底的に經驗を積んだにしても、扱て嫁して後に、呑んだくれの亭主を奈何に介抱するか、貧乏のどん底まで落ち込んだ宿六と共に、如何に質屋通ひの苦勞を嘗むべきかは解るまい。

人生は、人形弄りや飯事遊びでは相濟ま

ぬ。茲に於て、極く有り觸れた事件で、而かも可なり深刻な考量を費さねばならぬ問題が起るのである。

新らしい結婚といふものは、曾て經驗しない未知の世界に、一對の男女が盲目の歩を進める事である。いくら惚れ合った仲でも、相手の搔ゆい氣持や痛い感知の、直接自分の體軀に、何の交渉を有たない二個の物體の結合である。相互に明察の感應なき限り、衝突も起れば喧嘩も起り、遂に夫婦別れの幕も明き得る筈である。

二度目三度目の古い結婚にありては、相

互に先代又は先々代の亭主や嬪アと、比較研究する知識の潜在によつて、夫婦といふものは、斯塵不便と苦痛があるのだといふ諦めの觀念で、辛抱し得た新婚の從順さを失つて、何かといふと先婦先夫の經驗智から、喚き合ひ引つ掻き合ひの修羅場を演ずる。而かも圖迂々々しき性慾の關係から、簡單には相分れ去り難い。

—◇—

三たび結婚し、其三人の妻君に死別し、一妻毎に一人宛の子供を遺され、異母兄弟三人の遺兒を擁して、最早や更に娶らざるべく決心した。といふ氣の毒な中年の紳士の實例がある。

先妻の遺した二人の見供は、何れも學校の成績は優等で、後妻に迎へた女房も忠實

に亭主に仕へてゐる。而して此子供と後妻とが相反目して、同じ家に起臥を共にしながら、一年以上も口を利き合はない、といふ會社員の家庭の珍らしい實例がある。之を望めば温良玉の如き美人、家の内に外に起居進退優に氣品高き細君が、深夜或る利那に迫んで、狂聲四隣を驚かす病癖あるがため、遂に離縁話が持ち上りつゝあるといふ同情すべき商家の實例がある。

性慾の上から、道德の上から、而して法律の立場から、斯る實例をいかに善處し得るか、殊に五十一人の亭主を取り代へて、五十二人目の亭主で納まつてゐるといふ女傑本莊幽蘭の如き實例を、いかに解釋せんとするか。畢竟世の中の事象は、決して單純に片付け得べくもない。

—◇—

絶世の美人を妻君とする主人公は、概ね短命である。加之此頃のやうに物騒な世體では、美しい女房に留守させては、外部で仕事に十二分に奮闘する餘裕を見出せない

と、津野呂御亭の告白を聞いた事がある。醜女も見慣るれば寧ろ鼻につかず、一歩外に出ずれば柳眉花唇の女性を打見るだけでも珍らしく、之によつて常に、慰めを得るものである。家内の女は、却て無智にして教養なき凡庸質を仕込んで、献身的な女房とする所に努力の興味があると、得々として説いた人の話を聞いた事もある。

女を、眞に女房として、自分の流儀に仕込み了るには、どうしても十年の日子を要するとの事だ。

—◇—

新らしい女といふ看板をヒケらかして、生意氣な處作ある婦人は、大抵は御免を蒙りたい様な醜女にあらずんば、或は精神的に缺陷ある獨身者に限る。容貌端麗にして氣象の尋常なる婦人は、いつの間にもやら異性に戀して、戀の成就と共に、新らしがりやの女を廢業して、單に相手の男にのみ生きる道を見出す。

若し夫れ、斯種新型の婦人を娶りて其腰巻裡を脱し去るを得ない男は、米の相場と月給の高低のみの問題で、其空虚な頭腦が充たされたケチな野郎である。

嬪アに甘い亭主は、會社にあつては其下僚や部下に威張り散らす變な奴であり、女房を蹴飛ばす底の亭主に、時に頼み甲斐の

ある男性味を、発見し得る事がある。

—〇—

女房の哲學は、結局は女の研究である。女の研究は、頓て人間生活の問題である。人間味を題材としての研究ならば、女房哲學は、頓て會社哲學、腰辨哲學と、一致の共通點がなければならぬ。

堂々たる大會社の社長が、庶務の雜務までも、己れ自ら手を下して處理しなければ氣の済まぬのがある。コレは女房の福神の洗濯も、自分で手を出さねば済まぬ亭主であらうか。人事の任免權もなければ、資金の運用權もなく、それが却て立派に、専務とか常務とかの椅子に晏如たり得る資格の

重役がある。コレは食卓の上の亭主の徳利に酒の無くなつたのも知らぬ顔で、放つちやらかして置く女房でもあらうか。

疊と同様、女房は新らしいに限るの流儀で、入れ換へ差し換へ、新らしく社員を採用し教育し、而して之れを交代し廢棄し去つて顧みぬ會社がある。後進の新參者はお先き眞暗でトコロテン式に詰めかけ、古參の連中は、唯もう不安と焦燥とに驅られ仕事も手につかぬ様に仕向ける會社もあるといふ。

眞に女房哲學を會得した達識の士は、果して如何に會社員生活を觀念し得る哉。

當世泥棒氣質

—〇—

夏の日永に、震災當時の反古書藝杯を整理して見ると、今更新らしく記憶が甦る。

楠山 清

當三十五六歳

永口 正兵衛

當五十歳位

大野 英五郎

當四十七八歳

コレは、茲に主題となる泥棒及其連類者であつて、元兇は楠山で、永口は其友人であり、大野は永口の妻の親仁だと稱して居る。

—〇—

私は震災の當時、向島新小梅町に住んで居たが、住宅の前通りに電車が敷かれるために、市の電氣局から移轉料を買つて、徳川家から借用して居る百坪の地所の内、三分の二を電氣局に引き渡す事となり、着々工事を進めて残りの地所に地盛りをなし、そこへ住宅に模様換えを施して、建て直した處にアノ震災で、何もかも滅茶苦茶になつたのであるが、町内一統まだ電氣局に地所の引き繼ぎをしたのではないから、其まま従來の住居者に、權利がある事に解釋し得るのであつた。

—◇—

處が問題は、其電氣局の收容地所が、果して従来の住居者の権限内に存するか、將た當然電氣局の所有権内に屬するか、不明の點が、彼等の着目點であつた。即ち、江東一帶の電車新設沿線の目ほしい地點に於て、アノどさくさ紛れに乗じて、倏忽としてバラツクを建て初めた。電氣局が買収した地所に住宅を建設するのは従来の住居者の承認を得る必要がない。假りに電氣局から文句が出たにしろ、三月や半歳の内に氣の付く筈はない、と高を括つて、此火事泥を敢てした所に、渠等の凄味が存する。

—◇—

北は奥州方面と遠く北海道から、東京の

見

震災で何か旨い仕事があるだらうと、牛馬の眼玉を抜くといふ江戸村の住人の、其上手を行く奴等が、陸續東京に入り込んで来たのである。前述の栂山外二名も其一類で一體何處の馬骨か牛尾か、而して其名乗つて居る姓名が、果して眞個か嘘かも、今に解らぬ。

—◇—

要するに、渠等は手あたり次第にバラツクを建てると、直ぐにそれを右から左に賣り飛ばした。百圓位の材料をかけたものがありもしない權利金を加算して、普通五六百圓に賣り飛ばすのである。此場所は地代が入らないで三年間住めるのだ、電氣局の諒解がある杯と振れ込む。

處で、それを買ふ連中は甚麼人物かとい

ふと、渠等程に凄味はないが、何しろ東京は震災で全滅だ、焼けトタンや古釘を拾ひ集めても、莫大な金儲けが出来るといふ目論見で、近縣から蜚集し來つた何れも慾深の手合で、目の前で拵へたばかりの、其バラツク建を買つておけば、半年先き一年先きには、二倍や二倍半の値賣りが出来やうし、差し當り地代が要らぬのは、此上もない結構と買ひ込む段取りとなる。

—◇—

斯くて得體の知れない建物が、素性も解らぬ人から人へ、賣られ買はれて、遂に從來の町の人々が、焼跡に復興の安住を見出す時には、既に早くも出入口を塞がれて、汚穢極まるバラツクが建て列ねられ、侵略者は何處の何者とも知れぬ火事泥から、高

い金で買ひ取らされた寧ろ善意の、被害者の一人だと解れば、手荒に叩き出す譯にもなり兼ねるとあつて、實は手のつけ様もない實情となる。

—◇—

震災直後、私は従事する會社の仕事關係で、一時大阪に假寓して居たのであるが、其留守中、郷里の家兄が、爲の若物二三と焼け跡の灰掻きを濟まし、其地所内に境界の杭を打ち込み、電線を以て四周を圍んだといふ報知を受けたが、二三日経つと、其境界の電線も丸太の杭も、盗み去られて跡方もなくなつた、といふ知らせを受けた。超えて數日後、其地所内にも知らぬ二家族が、バラツクを建て、大きな面して、住まつて居る事を通知して來た。

見

—○—

幸にして私の町内の人々が、私の不在中侵略された出来事に同情して、此異端者を敵視し、近隣の誰一人、挨拶を交換する者がなければかりでなく、八百屋肴屋の如き買物さへも、出来兼ねる制裁を受けて、極度に屈辱されたので、私は歸京後、若干の賠償金をとつて、其地所全部の借地権を其泥棒に呉れてやる事にし、解決がついたのであるが、其交渉の圖迂々々しさと理屈を超越した鐵面皮とは、稀に見る珍奇なものであつた。

構山の妻の親仁といふ奴が、構山は人殺しでも何でも平氣でやる悪黨だから御注意下さいと、暗に私に脅迫染みた態度まで

も取つた。

そして渠等三人は、互に仲間喧嘩をしなから、渠等自身が火事泥頭目の片割れなる事をも自白した。尤、私から借地権を獲得するや否、更に他に有利に轉賣し去つた事は謂ふまでもない。

—○—

以上は、誠に平凡極まる事實談の一片であるけれども、近時わが保険界に於て、時に斯種に類する火事泥が横行し、内容の充實した基礎の堅牢なる會社の株を、人知れず買収し去り、突如其會社を乗つ取らんと企らみ、又は是等の上前を刎ねる底の、凄腕の人も出沒するやに聞く。警戒すべく餘りに遺憾な話ではあるまい歎。

敵首物語

—○—

此程、戦友共済生命の社長は、其經營する製薬に於て、突如八百餘名の男女工を解雇した。

當日同社長は、職工の歸宅時刻たる午後四時四十分男女工千六百名を社内の稻荷神社前に集め、昨今の不景氣に對して、會社は如何ともすることが出来ない、此まゝ會社を持続すれば、會社も諸君も共倒れにならねばならない。と悲壯な演説をしたので氣の弱い女工達は、感激して泣き伏すものさへあつたといふ。

かくて、全員の半数は解雇されたが私は

此事實を耳にして、名狀し難い凄壯な感に打たれざるを得ない。

—○—

曾て私は、某商事會社に於て、重役の不始末から其取引銀行がブツ仆れた飛沫で、二進も三進も行かないため、結局社内の大刷新と共に、従業員の過半数が、無茶苦茶事務の錆鈍の露と、消え去つたのを目撃した事がある。その會計課長といふのは平素邪智佞辯の男であつたが、自分達の居残つて、同僚大半の首が吹ッ飛ぶ悲劇に今更のやうに狼狽へて、四十面に泪と涙とを一緒くたに、悲鳴を擧げた光景を、今に

尙記憶してゐる。

凡ての會社銀行の經營難は、其經營の衝に當る重役及幹部の責任である。自分達の不屈と不埒とを棚に上げて、而かも先づ之が犠牲となり了するのは、従業員の大牛である。渠等の眼から見た従業員は、器械と同様一種の道具に過ぎない。

必要があれば、無制限に買ひ込み、都合が悪くなれば、無遠慮に放り出すのであつた。

株式組織の會社重役は、其株主の選出によるので、或は株主から詮衡委員が選ばれ其詮衡委員から投票又は指名によつて役員が定まり、或は更に役員相互の互選によつ

て社長が決まり専務取締役が定まる段取である。かくて渠等は、株主に對して眞に責任ある地位の人となる。

小は山間の一村會議員より、大は一國の國會議員までが、一般有権者の投票によつて選舉されるのが、憲政の常道であり原則である。

此立憲治下に於て、單に會社の従業者のみが、容貌や辯口によりて試験され、採用され、給料を當てがはれ、而して地位の確保なく生活の保證なくして、何時でも先方の都合次第で免黜されて、何人も敢て不思議とも想はぬ。

其生命保險の専務として、當時生命保險界の飛將軍として、目醒ましき積極的經營

方針の下に、保險界を馳驅した某氏が、失脚十年、今や老臘を提けて、陋屋裡に蟄伏して居る實例に對して、我々の同僚たりし人々が、餘りにも無頓着に、不安なるべき生活に晏如たる現状に比較して、寧ろ涙を此先輩に注ぐ餘裕さへ、見出せないのを悲む。

軍艦の犠牲者は、軍服と洋劍を脱して、三軍を叱咤した將軍が、竈の煙に烟びつゝ、子女教育の資金を得るため汁粉屋になつたり芋屋になつたりする。新聞記事を読んで、其胸中を忖度し感無量の時がある。

人物經濟の上から、社會生活の上から這慶現象を此儘放任しておくべきであるなら共存共榮などといふ贅澤な文字を、捨て去

るが宜からう。

失業者は、都下に三萬人も路頭に迷つてゐるのだ。

由來保險界の人物は、保險事業に従事して三五年も経てば、一旦他の事業に轉職し去つても、再び元の保險業界の彙に戻り來るが普通である。これは保險事業が、他の生産事業や金融事業に比較して、營業の基礎の學理的であり進歩的であり、従業の職員が智識階級者であり團體生活者であるため、他の事業界の亂雜、退嬰、不節制無趣味に耐えられないからではなからう歟。

一般銀行會社よりも進歩的にして、學理的なるべき保險業界の人々が、單に甲より乙に會社を轉々して、やがては頭が白くな

り、齒がバク／＼になつても、唯其日々が無事であれば、結構だと觀念し得らるゝのなら、蓋、天下は御芽出たいものである。

—◇—

上長の命を享けて、往年K會社に於て、私の識つた二つの例は、今に忘れ得ない所とする。

その一人は、放縱な外交員であつたが、「君の放縱は、名もない私の如き若輩に識られるのである、君は、妻君を考へないのか、子供を思はないか」と責めたら、彼の眼から大粒の涙が落ちた。彼は現に甲社の臺灣支店長を勤めてゐる。

四二

今一人は、契約係の主任であつたが、父兄のため家計を助けんとして、社金を横領私消した。彼は私の前に事實の全部を打明けて、其費消した些末の金高までも、記憶して誤たざる頭腦の明晰さに、私は寧ろ驚かされた。

「君のお母アさんは達者ですか。年老つたお母アさんが、此事件を知つたら甚麼に心配するだらう。」と謂ふと、彼は聲を揚げて慟哭した。私も眼底俄に熱きものを感じたのである。彼は、其後仙臺に乙社で奮闘し不幸短命にして已に亡し矣。

天賦定量説

—◇—

先年關東を見舞つた大震災を見て、これは天譴なりと叫いた筈がある。あれは神の下した涙の鞭なりと吐かした奴がある。何れも其身内には、一人の罹災者をも有たぬ無責任者の妄語である。然らざれば、身内に罹災者ありとも、己れ免れて無事なるに慢じて、無情冷酷に彼等を白眼視する手合である。あのドサクサに紛れて、興奮せる罹災民の周圍に、平氣で這麼囁語を放つのが、社會の識者といふものならば、識者面する連中のアテにならざるは、此頃の天氣豫報と何等違ふ所はない。

都下三十五萬の焼失戸數、一百二十萬の罹災人員、十數萬の死傷人員、これ等に何の咎めがあつて、悉く天譴呼ば／＼はされるのか、罹災を免れた國民は、殆んど全部能い子で濟まさせ得るのか。上下擧つた奢侈淫逸の隨風に對して、神の下した涙の笞だとして、其後一寸先きは闇だといふ地震國の民衆は、家が焼けても満足に保険金は貰へず、萬一の用意に衣食を節して、蓄へた貯金は支拂ひを受けられず、況して貸金の證書杯は、三文の値打もなきに懲り果てて、せめて無事泰平の間に、嘆へるだけ嘆ひ、飲めるだけ飲んでおけ、非常の場合に

四三

賸餘金の少々を持つて居たとて、何の足しにもなるものか、と更に錦羅を身に装ひ紛黛に姿を飾る、寧ろ反動的の此世態をどう解釋するのか。

—◇—

曾て私は、某博士から最高道徳論といふものを、興味深く聴いた事がある。小學校や中學校あたりで教ゆる修身とか倫理とかいふものは、平凡なる中等道徳であると謂ふのだ。

勤勉とか節制とか、克己とか犠牲とか、忍耐などいふのは、平凡なる普通道徳の標準であつて、慈悲、反省、甘受の三徳を修め得て、始めて最高に達すると謂ふのだ。

當然罰せらるべき罪科ありて罰せられ

而かも神を恨み人を悪むのが、劣等道徳級者である。何等罰せらるべき罪科なくして罰せられ、茲に神を怨み人を誣ふのが、普通道徳級者である。賞讃に値する善美の行爲を成し遂けて、却て誤つて之がため罪科をうくるも、何等天を恨まず人を咎めず、眞に従容として死に就き得る底の、覺悟と決心とを養ふのが、最高道徳の目的だといふ。

されば劣等道徳級者は、一貫して失敗の生涯を送り、普通道徳級者は、假令其事業に成功しても、終に幸福ではない。金が出れば泥棒に遭ひ、小供が出来れば病氣をする。或は位人臣を極めて、不肖の兒のため心痛の絶え間なき、或は巨萬の富を有して適當なる相続人なき類である。然るに最

高道徳階級者は、物質的形式上に乏しき地位にあるも、其環境家庭身體は、常に幸福の終焉あるものだといつてゐる。

—◇—

いかに養生して藥餌に親しんでも、死なねばならぬは、人生の定めである。家相をトし方角を究めても、遂に来るべき災禍は免るべくもない。正直一途の親仁が貧のため、縊れて死するがあり、泥棒を捕ふる巡査が、自ら盜賊を働き、人を濟度する尼僧が、戀故に放火犯を敢てして法律に裁かる。醫者の不養生、保険屋の保険嫌ひなど世は様々に轉廻する。

—◇—

私は、自分の周囲の人物や情景を見廻はして、天の人に賦課する運命は、一定の分

量があると獨断して居る。幼年を幸福に暮らした人が、晩年の慘苦なるも其一例である。飛び離れて破天荒に出世した者が、突如陋巷に失脚するも其一例である。世を偽り人を詐きて、一時の空名を博した者が、必らずしも其金箔の剥け去るを、防ぎ能はざるも其一例である。

世渡りの方法として、太く短く暮らす流儀もあれば、細く長く一生を送る流儀もあるは、此消息を裏書きする事實だと謂ひ得る。

天は二物を與えざるも、同時に又、二物を共に奪ひ去らざる事を、私は堅く信じて居る。

—◇—

陶宮術と謂ふのは、其人の生年月日によ

つて天賦の性質を指示し、缺點を矯めて特性を發揮せんとするに、便利な参考となるやうであるが、然し之を深く研究すれば、其父母各々の生年月日、其祖父母各々の生年月日に遡つて、而して自己の運命を解釋せねばならぬ事になつて、一向に徹底的の結論を握み得ないやうな氣がする。恰も骨相學を信じて、鼻が豊臣秀吉に似ても、眼付が石川五右衛門式では、明快な判断が出来ざると均しく、誰人でも同じ人間でありさへすれば、卦筮の何處にかナポレオンに似た所もあらうし、徳川家康に酷似した點

もなければなるまい。

—◇—

「天、我に薄するに福を以てすれば、我はわが徳を厚くして之を返へ、天、我を勞するに形を以てすれば、我は、わが心を逸して之を補ひ、天、我を厄するに遇を以てすれば、我は、わが道を行つて之を通ず、斯くの如くして、天、且、我を奈何せんや」といふ意味の文句を、古書で讀んだ事がある。私は、天賦の定量を信じて、二物を同時に奪はざる天を手頼る而已。

回顧十八年

眼辨生活を誓む十八年、願みて一瞬夢の如しであるが、水上老の子息金次郎君が當時六七歳で、呑んだくれの吾人に引つぱり廻はされて、業又邊に行つたのが、近く日本大學を卒るといふ今日。政界に出た友人は大抵代議士に成り済まし、「尾崎ケンが犬養ケンが」杯と熱を吹く。實業界にあつては殆んど重役級にあらざるなく頭に霜をおく年寄染みもあれば、眼のシヨボ／＼になつた隠居格もあり、氣の早い連中は、既に死んで了つたのも珍くない。而して私は、今更悟道に入つた積りで、方野の洋紙と一軸の洋筆を相手に、拙き藝に生きて行かうとする。恰も尾羽打枯らした浪人武士が、どこかの橋畔に鷹の上で、嘯唳れ聲でデロレンに似た話でも

うたつて居やうといふもの、ハヤで可哀相だと想ふほど、自分自身は氣の毒とも考へず。どうせ成る様に成らなかつたお蔭で、出世した人の例もあらうし、成る様に成つたために、金儲けをした人の例もあらうし、成るも成らぬもモウ一瞬の夢と諦める。

◇事業の経過

明治四十年N生命に入社。

在社六年同志と共に脱走。

大正元年K生命に入社。

在社三年新規支配人が、氣に喰はぬので

ハヤ出る。

大正四年H生命に入社。

在社二年B生命に契約包括移轉のため、
邪魔になるので譲らる。

大正七年N信託に入社。

在社五年、會社が潰れて浪人。

大正十一年T火災に入社。

在社三年、社長とソリが合はぬから、よ
したら宜からうと謂はれて辭職。

大阪の支店長病氣が重く、支店の次長と
いふがストライキで逐ひ出され、支店の事
務が差支へるから、當分出掛けて本社風を
吹かせよと、重役から油をかけられたのを
眞に向けて、意氣揚々大阪に出發の前日、
各課長の先輩連までを、一堂に集めて告別
の辭を叙べ、禪の一喝に言及した噴飯事が
N生命の時代であつた。

上長先輩の支店長と意見合はず、議論を

上下し喧嘩を始め、晝餉を仲入にして、復
更にドーアを締め切り、喧嘩をし續けた結
局、其支店長の出張中は、私が店務を見、
其支店長の店務を見る時は、私が出張する
といふので妥協した滑稽事が、N生命の時
代であつた。

「生命保険募集手ほどき」といふ小冊子を
楠秀太郎、岩間六郎二氏の序文と、田中小
太郎氏の跋文と、而して渡邊治衛門氏の題
字とを以て發行し、發行所が、神田の火事
で丸焼けになつたため、原稿料のフイにな
つたのが、K生命の時代であつた。

引き繼ぎを迫る後任の契約課長といふ男
の態度が、餘りに不遜で癪に觸るため、撲
り飛ばさうとしたのを我慢したが、此男一
ヶ月ばかりで、腦溢血で死んだ相だ。あの

時摸らないで宜かつたと思つたのが、K生
命の時代であつた。

薄暗い一室をあてがはれ、腰辨雜誌の刊
行を公認して、時々印刷代の補助をして呉
れた上、拙者「腰辨ノート」を重役室の卓上
に置き、來る客毎に紹介した専務の下で働
いたのが、H生命の時代であつた。

従て、其社の番犬を以て任じ、當時の東
洋新報社長五十嵐君を、面罵して逐つ拂ひ
後年迄「實に癪に觸つた生意氣な野呂だ」
と惟はせたのが、此H生命の時代であつ
た。

利息の僅な勘定と、株値の些少な箱取り
で經營する勤め先きの、客臭いの刺激さ
れ、折から東京電氣局から貰つた家屋の移
轉料、四千七百圓許りを手にして、職員に

黄白若干を投げ出し、女事務員小使給仕一
統に、呉服一反づゝを頒つたのが、N信託
の時代であつた。

虎のやうな男と聞いたが、實は猫のやう
な人物だ。あれでは困るとあつて、水上老
が元氣恢復の注射役に頼まれたといふ程、
御殿女中式の社風に、手も足も出なかつた
のが、T火災の時代であつた。

◇家庭の事情

明治四十三年妻を娶る。

明治四十五年長男生る。

大正二年長女生る

大正四年次女生る。

大正五年妻没す、行年二十五歳。

同年次女没す、行年二歳。

大正七年父を見送る、享年八十二歳。

大正九年母を見送る、享年七十一歳。
大正十年後妻を娶る。

名古屋支店に赴任の命を受けて、名古屋と新潟とは、青年の警戒地と聞き及び、急遽女難除けのお守りとして、女房を貰ったのが、N生命の時代であつた。その妻の死に會して、諸方から寄せられた香典を、片っぱしから開いて、米屋や八百屋の支拂ひに當てたのが、H生命の時代であつた。

顔齡の父を背負つて、名古屋に大阪に、老先き短き父の耳目を悦ばしたのは、夢の様なN生命の時代である。母の臥床年餘、必らず一週一回之を抱いて入浴せしめ、乳母車に乗せて墨堤を押し廻したのは、けに幻に似たるN信託の時代であつた。

先輩T氏の口添えと、親友K、S兩君の

肝入りで、母なき二兒のために後妻を娶り六年来荒み果てた家を齊へ、着々不如意の環境を脱せんと腕いたのが、矢張りN信託の時代であつた。

◇危禍と女難

N生命の末期から、曲りかけた生れ故郷の家道は衰へ、H生命を浪人して妻を失つた頃、家運は挽回の餘地もなかつた。家兄三人のために、之が整理に没頭して、空手空拳に七萬八千圓の整理残の債務を引き受け、動産差押の強制執行から、競賣處分の道具屋連の包圍を受け、箆筒の抽斗は封印の絶え間なく、其頃二週間目三週間目には高利貸の調印を貰つて、執達吏役場に競賣延期の申請に忙しかつた。従て飲めぬ酒の分量も上がつて、冷酒五合づゝを平けたの

は此時代であつた。

引き續きの浪人中、中外興信所といふサチャカな所に、副所長に擔ぎ上げられ、次で伊藤仁太郎君の創設した商工興信所の經營に身を任ねて、家郷の名譽恢復に忙しき最中、薄ボンヤリした部下の一人に、脅喝取財の嫌疑を受けて引つ張られた者があり貧弱ながら其所長たる私が、當面の責任者として、情を知悉して不正金を收受したんだらう、といふ思ひがけない飛ばツちりを喰らひ込み、十日餘りも東京監獄に未決監房に放り込まれた。

容貌に於て風采に於て、言語態度に於て一點更に女に持て囃さるべき素貴なき體格的の私が、女難に罹つたのはそれから間もない時であつた。自宅に暴れ込んで来た事二

回、勤め先きの會社に嘔吐り込んで来た事一回、重役宛親展書、私宛脅迫状連日の妖魔と闘つて、其間先方の代理者と名乗る辯護士、新聞記者、看護婦會長、骨董商の外千三ツ屋、雑誌業者等も参加し、Y氏やK氏やU君や、遂に水上老まで煩はして、漸くやつと局を結び、幸に出刃庖丁の錆にもならず、ビストルの烟にもならずに解決することが出来た。

大正十二年の震災に遭つたのは、T火災に入社した翌年である。家族四人、提げて出たのは、生命辛々唯父祖の位牌だけ、恰然乞食のやうな姿で、財産としては、各自の着て出た一晚中煙と埃とに塗れた衣類だけ折角改築したばかりの住宅は、借地権利金や雜作権利金を合算し、一萬四五千圓に値

する奮闘記念の建物を灰燼として、之を擔保に借り入れた債務の數千金のみを残した。

◇—◇

高の知れた渺たる五尺の一腰辨者十八年の回顧も、出来るだけ要領を壓縮して尙但以上の通り、十段百八十行五千九百四十字

媒酌制度

—◇—

戀する者同士愛する者同士が、甘い言葉を囁き合つて、情熱の迷るがまゝに身も心も意馬心猿の狂ふに任せ、私通し密通し成は心中し果てる。現代の世態は、敢て之を

に餘る活字となる。之を復雜なるべき天下國家の興亡盛衰を仔細に論述するに於ては浩漭なる書物となつて猶相當の疑點が残り頓てこれが専門に講演する先生の、パンの材料となり得るは、敢て不思議がるにも迫らない。

不思議がらぬ程に馴致されて、一方では却て、純情に殉する事を、優さしい人間味を發揮したとして、之を讚美するさへある。

某妻女の家出、某夫人の墮落、某女史の情死等々、毎日の新聞は眼まぐるしくも斯

る記事を滿載する。新聞の文字を拾ひ讀みする頑是なき小學兒童の頭腦に、果たしていかなる印象を與へるであらうか。

—◇—

頑是なき小學兒童を俟つまでもない、最近の事例は、育英に身を委する若き女性の活きた話がある。

それは小學校から師範學校時代を、優秀の成績で過ごした某女が、地方小學校の訓導として、教へ子に對する教壇上の評判も父兄間に相當好良の彼女であつた。然るに神聖なるべき學堂の門にも、浮世の消息は遠慮會釋なく流れ込み、上流家庭の情事を摘發した新聞記事を話題に、代用教員連の利那主義の陶酔談もあれば、時に男訓導達の無作法な猥談も交ちつて、彼女の耳を掩

はしむるものがあつた相だ。

曾て憧憬れた育英の事業も教育の社會も遂に有り觸れた俗界人間の交渉と何の變りもなく、折角選んだ天職に驚愕と失望とを感じた彼女は、やがて倦怠と自棄とに陥つた。

世態の表面智識に高を括つたほどに、遇々色魔的男教員の誘惑に身を許して姪娠し同僚の非難と父兄の攻撃とに、今更社會生活に制裁力あるに狼狽して、辭表を校長に提出し、醇朴なる地方郷黨人の眼から、其身を匿くしたといふ生々しき事實である。

一方に實社會の墮落面をさらけ出して、意志の薄弱なる婦女子を挑發しながら、他の一方には、出來事の曉、一滴同情の泪もなく之を葬り去つて顧みぬのが、冷酷なる

現代の實相である。

—◇—

更に圖迂々々しきは、美貌を矜る四十代の姪妾である。下淫を樂しむ本能に墮して年少にして地位卑き男性を籠絡し、甚だしきは七八歳又は十數歳も年下の、青年と出奔し情死し、同棲數十年の亭主と、數名の實子女を捨て、顧みない。新聞は麗々しく寫眞を掲げて、之を讀者に紹介してゐる。

向島竹屋の渡しの老船頭の物騒りに、水刷竿握る稼業柄、一ヶ年に救助する投身者二十組、助け上げられて未遂ぐる男女殆んど無く、救つて呉れた命の親に謝禮に来る者、十中に一件ありやなしやといふ。自ら好んだ相手と死を決して進む男女の、添ひ逢けられぬ理由はそも那邊にあるか。

—◇—

媒酌の制度は、東洋の特徴である。原始時代に遊牧民として、移動生活を送つた西洋人が、相互に祖先や遺傳の系統を知らず鼻で嗅ひたり舌で嘗めたりしてから、相手を選ぶ結婚制度に反して、一定の土地農耕に従事した東洋人は、先祖代々の素性は各人相互に理解する所であつて、開れ々々形式の上に媒酌人を選んで、黃道吉日を卜する東洋の結婚儀禮は、眞に公正端嚴である。夫妻事を構ふるとき、媒酌人は、或は調訂し或は訓諭して圓滿に局を結ぶ。狎れ合ひ男女の熱の冷めると共に、相去り相離るゝと同日の談でない。

—◇—

新聞の廣告によつて、従業社員を吞吐す

るのが、頃來保険界の流行となつた。最高の學府を出ながら相當の知己先輩を無視し新聞記事に釣られて闇雲に押し寄せ、低劣なる試験委員の手にかゝつて人格を高下さ

貞操問題

—◇—

世の中の進歩と共に、法律規則の改廢は止むを得ないとして、道德標準の一律に行かざるのも拒めない。此頃男女貞操問題の論議が八釜しくなつて、待合の女將が、貞操蹂躪の訴訟を提起するもあれば、獨立生活の男子が、童貞蹂躪慰藉料請求の訴訟を提起したのもある。自墮落の身持から、自

る。會社は廣告料三四十金を費せば、時節柄一舉に、百人近くの希望者が得られると傲語す。さても淺ましき哉。

ら好んで魔窟に入り込み、浮かれ男相手に其日々々を面白可笑しく暮らすのが、其婦人の選んだ唯一の享樂の天地であるといふ本人に向つて、貞操擁護醜業婦解放を叫ぶ篤志家もある。

而して貞操に關する徹底的觀念なく、貞操の定義に對して疑念を抱くのが、現代婦人通有の現象である。

一〇一
 試みに婦人に向つて、貞操を代償として其良人の身上を脅迫せらるゝ時、たとへば良人の出勤不在中、其上長重役者が細君を脅迫して、意に従へば良人の地位が確保され、又は生活が保護さるゝ場合に、意に従はざれば不測の危害が、良人の頭上に見舞ふ場合に、眼を閉ぢて良人を助くるか、將た肉を淨くして良人を見殺しにするか。といふ簡単な質問を出して、能く突嗟に明快に答へ得らるゝものが、果してどの位の割合にあるであらうか。

一〇一
 日常閑嗜に觸るゝ新聞雜誌の、挑發的の記事以外に、小説單行本中、自然主義派の現實描寫は、市井婦女子の貞操を汚濁して

恬然、怡々として性交を仕遂けて平然たるを讀ましめ、莫迦正直に清淨を保つは、己れ一箇だけで世間のすべては、悉く斯かるものだと思合點の謬想を抱かしめ、又は三文小説の微に入り細を穿つた光景に陶醉して、われから斯る機會に觸れんと期待せしむるに至る。

一〇一
 美しき婦人の貞操のみが危いのではない醜凡の容貌を有する婦人には、却て競争者なきため、陥れるに安易なりとて、之を覗ふ毒魔もあるといふ。馬にも似たらん齒齦の婦人、唐もろこしの毛の如き赤髪の婦女は、われから進んで誘惑に落ち込み、貞操を何の絲爪とも惟はぬが多いといふ。

一〇一
 一たび過つて、幼馴染みの男性の來訪に

犯され、良心の呵責に堪え兼ねて、惘悞煩悶の極病を得、遂に死を致したといふ妻君があるとして、之を不貞の女として葬るべきか、肉に傷づいて靈に淨化した婦人として教すべきか。必らずしも研究の餘地はあるまい。

一〇一
 一たび嫁ぎて、何等肉體上不正行の非難すべきなきも、其所天の家には、單なる形骸を托するのみで、家政を顧みず家名を恥ぢず、無智にして教養なき不節制を敢てし近隣の金棒曳きとして指彈さるゝが如き妻女ありとせば、たゞ肉に汚れざるが故を以て、之を貞操に缺くる所なしと、評し得べきか、將た不貞腐れ嬢アとして、排斥し去るべきか。是れ亦、必らずしも研究の餘地はない。

一〇一
 愛する者のためには、身も心も捧げ盡すのが、嚴正なる現代の貞操觀念である。一方に敵に媚を賣り、他の一方に味方を庇護するが如き、常盤御前式の兩天秤は、現代に容れられざる貞操觀念でなければならぬ。

一〇一
 阿堵物のため身を鬻ぐ賣女の心情は、慙れむべく傷ましい。性慾のため身を過つ處女の不品行は、悲しむべく惱ましい。男子五尺の紳士が、其進退を二三にする無節操に至つては、之を飽くまで咎むべく、斷じて許すべきでない。

一〇一
 或は甲に結びて忽ち乙に背き去り、或は丙に交りて倏ち丁に叛き去る。或は上長甲

其のために上長乙某を陥れ、時に忽ち變じて上長丙某と策應して、先きの甲某のため陰謀を企つ。斯くの如きが腰辨界の常弊な

りとせば、單り婦女子の貞操を論ずる杯は寧ろ臍茶の至りでない歟。

テーノ口禮讚

一〇一

女房が高慢ちきで、鼻の高過ぎるのを怒つた亭主が、花鉢で其鼻をチョン切つたといふ記事を、最近新聞で讀んだ。觸つて見なければ解らないやうな低い鼻の持主でも亭主の流儀を蹂躪し、終日の勞苦に疲れて歸つた宿六を捉へて、餘蘊なく毒づく山の神も珍らしくない。斯慶のになると、折角花鉢を用意しても、其鼻をチョン切るに苦

心と努力とを要し、結局額を叩いて諦めるか、鼻の下を延ばして、成行を觀望するかに歸着する。毎月の給料袋を、其まゝ之を恭しく細君に捧げて、其内から小使錢若干を掬射如として押し戴き、豫算外の支出は、數島の莚二十本の代金も、一々内君の承認を要する而かも其内君、必らずしも日本一の美人とも限らない。

一〇一

無智識無教養の婦人を妻に持ち、之を教ゆれば喚き、之を諭せば反抗する。之を撲つて懸飛ばせば、却つて引掻き廻り武者振りつく。之を相手にすれば際限なく、之を放つて置くに若くはなしと、大悟徹底した亭主が世に少くない。

社會上の地位高く、徳操上の信念敬すべき先輩が、往々にして斯種醜凡なる婦人に囚まされて、日常家庭に快々として樂しまざる者敢て少しとしない。此場合よく一個の女性を家庭に濟度し得られざる其良人が足一步門外に出づれば、敵は其威信を怖れ味方は其徳望を慕ふ。身卑しくして同僚儕輩に輕侮せらるゝ愚人が、我家に歸れば、倏ち王公の如く其妻女を願使し、妻女は渾

身一切を犠牲に供し、倘但良人のために足らざるを恐るゝが如く仕へる實例、又一方に敢て絶無でもない。

一〇一

西洋文明の輸入は、東洋に女尊男卑の氣風を教へた。然し此女尊男卑の西洋氣質はたゞ表面の形式に過ぎない。

人前を離れて世間體を憚らざる彼等の家庭に這入れば、寧ろ男尊女卑の内容であり實體である。

日本は、表面に夫唱婦隨主義を装ふけれども、其實際は女尊男卑であつて、古來の歴史が之を證明し、連綿として今日に及んで居る。其上更に、女尊男卑の舶來品が輸入されたのであるから、其色彩は、一層濃厚になり優らざるを得ない。

歐米に女權擴張の聲の大なるは、男性に虐けられたる婦人の苦しき叫びであつて、日本に女權論者の聲に張合なきは、現状滿悦の反映でなければならぬ。米國の婦人は親爺教育の漫畫を見て、パン棒を亭主に投げつけるマギーの偉力に溜飲を下けて喝采し、日本の男子は、痛切に自分の癢に觸れらるゝ心地を以て、圓子鼻の女房に酷遇せらるゝヂグスに、同情して却て顔を反ける。

一〇一

女房は、どこまでも女でなければならぬ。家庭内の些事や子供の世話に努むる婦人であるならば、たとへ少々位御事を尻に敷いても許し得る場合がある。若し夫れ家妻が、四六時中家を外に飛び歩き、家事を

修めず兒女の訓育を敢てせざるならば、其家道は素れ其家運は衰へ、而して斯の如き家庭によつて天下が満たさるゝならば、必ずや其天下は亂れ去らねばならぬ。一家の主人、よく家人を通じて婢僕に至るまで、其威令の行はるゝ家は、繁昌して瑞運が漲る。

一〇一

一會社の社長、専務、支配人、課長以下すべての従業者、融然としてこれ一家の一團である。表面社長の威歴に屈して、時に竊に、其社長に怨嗟の聲を放つが如き幹部者を有する會社は、蓋、一時の大を致すと雖、遠からず社運衰へ外に事を構ふる事例歴々である。一家の妻其亭主を敬せず、一社の社員其社長を重んぜずして、將た天下

に他の何者を敬し何者の指揮を受くるか、寧ろ亭ノロたり得ずんば、自ら唯去るべき

ある而已。

親莫迦茶ン倫

一〇一

汽車や電車の中で、立派に着飾つた美人が、羨つ垂らしの凸凹顔の児供を頼づりして、可愛がつてゐるを見受ける。往來の途上を氣六ヶし相な貌した紳士が、腫物だらけの汚ない児供を奪めるやうに、可愛がつてゐるのを見受ける。これが親としての、人間の情合である。

此の人の親としての情合は、之を押し詰むれば、博愛仁慈の精神の源泉となり、之

を平たく壓搾すれば、献身犠牲の精神の根元となる。神に通じ佛に通ずる天地自然の真心である。

一點邪氣なき天使の如き兒女を愛撫する情合なきものは、人間としての片輪であつて、必らずや其良人に仕へて不貞に、其親に事へて不孝に、社會公共に對して、徒らに不平不満多く、たとへ特殊技能の見るべきものあるも、恐らくは裏長屋裡井戸端會議の、金棒臭きの靴を出でまい。

子供の生れるとき、眼が一つ多くとも指が一本少くとも、それが不具者として暗い一生を送らねばならぬことに思念すれば、親は蓋、生れ出る兒女の容貌の美醜などは眼中にない譯だ。人並に満足に手二本足二本、目、鼻、耳、口たゞ尋常であるべき事を祈つて止まない。親の因果が胎兒に報ひ來つて、生れながら盲啞者など、いかばかり親心を傷ましむるであらうか。

茲に於て、子供の鼻の高い低いは問題でない。實は、人間並に鼻がついて生れたのが、親としての自慢でなければならぬ。満足な足を二本持ちながら、其一方が五分か一寸長過ぎても、親としては、どんなに肩身をせまく、嘆き悲しむことであらうか。

之は、小學校を今年首席で卒業した少年に、其小學校長が附與した表彰狀の文面である。此少年は、東京の震災で焼け出され田舎の小學校に身を措く一年半、依怙地な繼母に事へて至孝を盡し、生母に代つて身の廻りの世話を一妹に致したのが、土地の人々から校長の耳に入り、一千の學徒中、毎朝新聞配達する一男生と、盲目の祖母を相手に家の事一切を擔ふ一女生と共に、表彰されたのであつた。其繼母はこの事あつて以來、深く發心して身を慎しみ、實子女を待つが如く愛撫するに至つたといふ。此少年の親仁は好きな酒を斷つて、表彰の効果にニコついて居るといふ。

或地方の高等女學校に、評判の高い美しい女の先生があつた。其土地の富んだ家の愛娘として生れたが、聲を貰つて二日目、其聲は逃げ去つた。結婚不能の缺陷ある身の上であつた。其上坊主頭で鬘を被つてゐるといふ評判も立つた。家産衰へて獨身主義を標榜し、専ら育英の事業に身を捧けてゐるが、あはれ乙女の春知らぬ彼女の一生は、どんなに淋しく晩年を送るであらうか

資性温良學問を勵みて成績群を抜き、内にあつては、父母に仕へて孝に深く妹を愛し、外にあつては、友に交りて情に厚く、洵に少年の模範とするに足る。仍て茲に之を表彰し、頭書の賞品を授與す。

維新の當時、奇傑桐野利秋は、弟に秋光魚を喰はしたといふのみで、其愛妾を離別し去つた。江戸の事情を知らぬ弟が、武士に切腹魚を膳に上せたと激怒したため、一言の辯明もせず愛妾を追ひ出したのであつた。繼母の愛に溺れて、實子女を暗に泣かしむる父親が世に尠くない。

會社の社長以下各幹部よく人の子を害ねず、温き慈愛の心を以て、部下後進を誘導する者幾許あるか、親莫迦茶ン倫は、實は天下太平の標語でなければならぬ矣。

(完)

昭和四年五月二十五日印刷
昭和四年五月二十八日發行

定價金貳圓五拾錢

不許
複製

著作
發行兼

安藤 政治 郎
千葉縣松戸町一八九三

印刷者

友田 寛治
東京、牛込、西五軒町三四

發行所 保險興信社

東京、小石川、表町七九、
電話、小石川二三二二
電話、東京五八八一五

保險銀行通信社發行
安蒜頑涕生の快書

四六判、一六八頁、奇拔高雅の装幀。
定價壹圓、送料四錢。(前金御注文の事)

保險圖將として世界的記録保持者

忽六版

外交界の
鬼才 渡 幸吉

壹百萬圓の巨富を贏ち得た成功者

「五十人前の仕事をする渡氏の奮闘傳」と東京日日新聞から推奨され、「如何に活躍し奮闘したかを語ると同時に、人心の機微を掴んで保険事業の内容を、如何に高めたかを記す」と日本及日本人から賞讃され、而して「彼の経歴を詳しく説くと共に彼が如何に斯く超人的の大活躍を、爲し得るかを説き得た保険外交の秘典である」と實業之日本から賛辭を得たのは、正に是れ本書であります。

發賣元

保險興信社

東京、小石川、表町七九、
電話、小石川二二二二、
板野、東京五八八一五、

本社、大阪市東區今橋四丁目

電話、本局〇〇二二一〇〇二七

支店、東京市丸の内郵船ビル

電話、丸の内〇六五八一〇六五九

日本生命保險株式會社

取締役會長 山口吉郎兵衛

專務取締役 弘世助太郎

東京支店長 田村幸策

東京市丸の内郵船ビル

電話、丸の内三二二二一三二二四

日華生命保險株式會社

取締役社長 川崎肇

常務取締役 河合良成

取締役支配人 菅田英久

東京市麹町區大手町二丁目

電話、丸の内一五二一一一五二四

日清生命保險株式會社

取締役會長 山田英太郎

取締役社長 望月軍四郎

常務取締役 原田駒之助

東京市京橋區新着町

電話、京橋一二二八一一二二九

蓬萊生命保險相互會社

取締役社長 太田清藏

專務取締役 武末祐三郎

東京市麹町區有樂町一丁目
電話、丸の内二〇三六―二〇三八

東華生命保險株式會社

專務取締役 清水景吉
常務取締役 相澤正悦

東京市麹町區大手町二丁目
電話、丸の内二四八一―二四八五

東洋生命保險株式會社

社長 長木村雄次
常務取締役 大原萬壽雄

東京市麹町區內幸町二丁目
電話、銀座二六〇四―二六〇五
三二六〇―三二六一

東海生命保險相互會社

取締役社長 松方五郎
專務取締役 加藤辰彌
取締役支那人 仲宗根玄愷

東京市京橋區南傳馬町二丁目
電話、京橋二一〇二―二一〇五

千代田生命保險相互會社

取締役社長 門野幾之進
取締役副社長 北川禮弼
常務取締役 堀井卯之助

東京市麹町區丸の内二丁目
電話、丸の内〇三一八―〇三八五

中央生命保險相互會社

社長兼專務取締役 前田利定

東京市麹町區內幸町一丁目
電話、銀座二三八六―二三八八

太平生命保險株式會社

取締役社長 石井徹
專務取締役 塚本明壽

東京市京橋區疊町
電話、京橋三一六一―三一六九

片倉生命保險株式會社

取締役社長 今井五介
專務取締役 片倉脩一
取締役支那人 平川房吉
副支那人 岡安理平

東京市京橋區千代田ビル
電話、京橋二二三九―二三四四

太陽生命保險株式會社

取締役社長 西脇濟三郎
專務取締役 清水文之輔
常務取締役 洲戶吉漸
支那人 難波誠四郎

東京市京橋區金六町
電話、銀座二三四六 三六七六
四八八〇

大安生命保險株式會社

取締役社長 橋本萬右衛門
專務取締役 川村錦次郎
取締役支配人 中村文四郎

東京市麴町區平河町六丁目
電話、九段〇一九三 二一六二
二一六三 二一七一

八千代生命保險株式會社

取締役社長伯爵 奧平昌恭
專務取締役 宮内國太郎
支配人 山縣良夫

東京市京橋區南傳馬町三丁目
電話、京橋二一八一—二一八七

第一生命保險相互會社

社 長 矢野恒太
取締役支配人 石坂泰三

本社、大阪市北區堂島北町
電話、三〇〇—三〇三 三〇〇—三〇三
支店、東京市麴町區丸の内三丁目
電話、丸の内〇五七一—〇五七二

富士生命保險株式會社

取締役社長伯爵 中山輔親
專務取締役 岩田三平
常務取締役 大野秀和
支配人東京支店長 河野九峰

本社、大阪市東區北久賣寺町二丁目
電話、船場一八〇—一八一
支店、東京市京橋區五郎兵衛町
電話、銀座〇〇七—〇〇八

壽生命保險株式會社

取締役社長 岸本兼太郎
專務取締役 猪飼九兵衛
支配人 鴻田秀一
東京支店長 岡田淳司

東京市麴町區丸の内一丁目
電話、丸の内一二二五—一二二九
一二三〇

帝國生命保險株式會社

社 長 朝吹常吉
專務取締役 名取夏司

東京市京橋區尾張町二丁目
電話、銀座一八三四 一九八八
二〇二七—二〇二九
三五一九

國光生命保險相互會社

取締役社長伯爵 中川久任
專務取締役 岩間六郎

東京市麴町區有樂町一丁目
電話、銀座二九〇五—二九〇九

愛國生命保險株式會社

社 長 原邦造
專務取締役 法學博士 曄道文藝

東京市芝區櫻田本郷町
電話、銀座二二三〇 三二六五
三二六六

共保生命保險株式會社

取締役社長 藤田政輔
專務取締役 山田敬亮
常務取締役 福田貞助
取締役支配人 武谷成直

東京市麹町區丸の内二丁目
電話、丸の内一〇一—一〇一五

明治生命保險株式會社

取締役會長 武市利美
專務取締役 藤田讓

東京市日本橋區銀座河岸
電話、茅場町一二三一—一二三七

共濟生命保險株式會社

取締役社長 安田善五郎
常務取締役 柳谷巳之吉
常務取締役 佐々木秀司

東京市麹町區山下町東洋ビル
電話、銀座三四九一 三六〇七
五四一八 五四七八

三井生命保險株式會社

取締役社長男爵 團琢磨
專務取締役 野依辰治
支配人 星孝治

東京市麹町區內幸町一丁目
電話、銀座三三八〇—三三八三

仁壽生命保險株式會社

取締役社長 下郷寅太郎
專務取締役 吉澤銚三郎
專務常務取 玉木爲三郎
常務取締役 窪田源一郎
常務取締役 村上富男

東京市麹町區丸の内三丁目
電話、丸の内一二八八

富國徵兵保險相互會社

取締役社長 根津嘉一郎
專務取締役 伊豆凡夫
常務取締役 吉田義輝

東京市京橋區銀座三丁目
電話、京橋二二〇一—二二〇五

第一徵兵保險株式會社

取締役社長 太田清藏
常務取締役 山口榮吉

東京市京橋區銀座一丁目
電話、京橋五〇五六—五〇五九

日本共立火災保險株式會社

取締役會長 原錦吾

東京市麹町區大手町一丁目
電話、丸の内一三〇一—一三〇五

東京火災保險株式會社

取締役社長 安田善五郎
取締役副社長 長松篤
男 常務取締役 小松林藏
常務取締役 南莞爾

本社、橫濱市中區本町五丁目
電話、橫濱五一三四—五一五一
支店、東京市日本橋區通四丁目
電話、日本橋二三一一—二三一八

橫濱火災海上保險株式會社

取締役社長 井阪孝
專務取締役 吉井桃磨
東京支店長 石田祐六

東京市丸の内丸ビル
電話、丸の内二二二六—二二二九

東邦火災保險株式會社

取締役 下田寬治

本社、臺灣臺北市北門町
電話、臺北四〇四、一五〇四、二二九
支店、東京市丸の内東七號館
電話、丸の内三三六—三三六九

大成火災海上保險株式會社

常務取締役 益子逞輔
常務取締役 林熊光

東京市麹町區內幸町大阪ビル
電話、銀座〇三〇七、三〇三〇
四七五一、四七五二

大日本自動車保險株式會社

取締役社長 美濃部俊吉
專務取締役 高島久雄

本社、大阪市北區會場崎上二丁目
電話、北〇〇七五—〇〇七七
二五〇一—二五〇三
關東營業部、東京市京橋區出雲町
電話、京橋〇五四〇—〇五四六

共同火災保險株式會社

專務取締役 廣瀬鉞太郎
常務取締役 小倉誠介

東京市麹町區內幸町一丁目
電話、銀座五五八〇—五五八六

帝國火災保險株式會社

專務取締役 黒田馨介
取締役 下田寬治

東京市京橋區五郎兵衛町
電話、京橋一一八五—一一八七

昭和火災保險株式會社

取締役社長 永橋至剛
常務取締役 大西竹二郎
常務取締役 橋本虎次郎

保險興信社事業要項（坤）

▲ 保險興信社は、被保險者と契約者の立場からして、保險會社に對し、監視監督の任務を帯びます。

▲ 保險興信社は、生命保險だけでも、五十億圓の契約高を有つ我國保險事業界に於て、唯一専門の興信機關であります。

▲ 奉仕内容

一、出版部

保險會社の信用、破信會社の内幕、暴徒外交員の暴露等に就て、毎月百頁位の出版物發行（定價一部金五十錢）

一、調査部

會社の信用、保險金の請求、解約及失効の手續、保險證券擔保の貸付金等に就て、個切可事なる取扱（料金各件毎に安價協定）

一、法律部、調停部、融資部、密偵部等有らゆる事項に對する發奮邁進。



